

山岳スキーと雪崩の危険

新田 隆 三

1. 山スキー時代の到来

もう15年も前の古い話だがスイスの国立雪崩研究所に留学したとき、官費でダボススキー場のスキー学校に約10日間入れてもらい、仕事に必要なスキー技術の向上を計ったことがある。北大のスキー部山班（現在の山スキー部）を卒業した私だが、ダボスの大斜面雪崩調査ではチョロ曲げで疲れてスイスの同僚のお荷物になってしまったので、「これはいかん」と研究所のボスにスキー学校入学を申し出てお許しを得たのである。

スキー学校の初日に初心者クラスへ行って滑ると、教師が上のクラスへ行けという。こうしてその日、順ぐりに試してみたら、私は上から2番目のクラスでストップとなった。最上級クラスはスキーツアー中心の山スキー専科というから、私の腕前ではまだとてもスイスでの本格的山スキーに耐えられないと判断されたことになる。

この2級クラスでは教師は寡黙である。急峻でコブの多い壁をブッ飛ばして下る教師の後を、我々数人の生徒がただだ必死で追いかける。要するに体力を消耗するチョロ曲げは最小限に抑えてスピードに強い足腰をつくらなければついて行けない。この滑降訓練の10日間を通じて、私はヨーロッパアルプスのスケールの大きい山スキーというものが、いかに上級のスキー技術と体力とを要するものであるかを悟ったのである。

表-1 ヨーロッパアルプスの雪崩死表（1975/76～1984/85冬）

場 所	死者数	%	国	死者数	%	スキー場外	%
山スキー	583	48	フランス	351	29	129	43
スキー場外	301	25	スイス	324	27	84	28
登山	120	10	イタリア	248	20	46	15
スキー場	36	3	オーストラリア	256	21	40	13
住宅	38	3	西ドイツ	31	3	2	1
その他	45	4					
道路	87	7	計	1,210	100	301	100
計	1,210	100					

(V a l l a F. 1986)

東西に走るアルプス山脈は西アルプス（フランス）で南北の幅が狭く、山がそれだけに盛り上っていて急峻である。その次に高いのが中央アルプス（スイス）であり、東アルプス（イタリア、オーストリア、西ドイツ）では山脈の幅が広いかわりに山頂は低目である。したがってスケールの大きい山スキーの本場はどうしてもフランスになってしまう。

ヨーロッパアルプスにおける最近10年間の雪崩死者の統計をとると、フランスでの「山スキー」や「スキー場外」の犠牲が目立つ。ちなみに「スキー場外」とはスキー場の乗物を利用して斜面を登り、スキー場がオープンしていないコースやスキー場の周辺でスキーを楽しむケースを指す（表-1）。

こうした山スキーヤーの雪崩犠牲者の多さから、欧米の雪崩専門家はいま山スキーヤー向けの雪崩教育に力を入れざるをえなくなっている。

わが国をふり返ってみるとスキーリフトもグングンと高所に伸び、スキーヤーのレベルアップは著しい。硬いコブ斜面でのチョロ曲げに飽きてバリエーション・ルートに飛び出す人もふえてきた。道具もよくなり山スキーは隆盛である。いきおいスキーヤーが雪崩に遭遇する機会もふえてきている。

2. 雪崩の引金としてのスキーヤー

若い日の私は北海道の山々で思う存分粉雪を蹴散らして山スキーの醍醐味を味わった。今その昔を専門家の目で思い起すと、結構危険な時と所で私どもは滑っていた。ただ私は技術が未熟で急な新雪のついた壁を滑れなかったために、雪崩にやられなかったのかも知れない。

わかりやすくいうと、急斜面の積雪は稜線からぶらさがっている氷板の一種とみてよい。登山者がある急斜面に多人数載ると、その重みで氷板は割れやすい。ましてスキー着用者の場合は短時間に広範囲の氷板に傷をつけていくことができる。スキーは凶器なのである。

スキーでの斜登が急斜面すぎて行きずまるとキックターンを行なうだろう。これまた急斜面に傷とショックを与える雪崩促進行為の一つである。

いくら日本の気象庁が雪崩の恐れがありますとイソップ物語の「オオカミ少年」のような予報を繰返しても、積雪の中に弱層や水分のたまった層がない場合にはどう転んでも安全である。理由は気象が雪崩れるのではなく弱い積雪しか雪崩れないからである。

ただその積雪が弱いかどうかは、雪の表面を歩くだけではシャープに判断できない。簡便なシロウト向きの危険判定法は、たとえば「弱層テスト」のようなものがあるが、まだ数値の裏づけに乏しいので説得力を欠く。

さて、雪崩遭難者のほとんどは自分達の行動と自分からかなり離れた雪面に生じた割目とは無関係があるという見方をする。しかし急斜面の積雪はその中に小さい割目を多数秘めており、あとは人間の体重やショックやスキーによる傷でそれらの割目が一つなぎの割目になるのを待っているような時が多い。したがって、必ずしも自分の足元から雪崩は出ない、というのが大きく崩れる雪崩の特徴なのである。

スイスにおける 1981/82年冬の雪崩死亡者14件20人のうち、自然発生の雪崩にまきこまれた例は3～4件に過ぎない。あるグループの250mも上方の雪面に割目が走ったケースですら、そのグループによって大斜面の積雪のバランスが乱され、雪崩を誘発したという疑いが専門家から指摘されている。

スイスの雪崩専門家M・シルト（1972）はこれまで雪崩で死んだスキーヤーの約95%は自分らがひき起した雪崩によっていわば自殺したのである。いいかえれば雪崩遭難ではなくて雪崩事故であると明言している。

オーストリアのA・ガイル（1972）も同国13年間（1959/60～1971/72年冬）の雪崩死者326人のうち63%が誘発事故の死者であるとしている。スキー着用の死者は216人にものぼり、スキーの凶器性は明らかであろう。

かつてこの点を雪崩研究家の日本山岳会・金坂一郎氏（故人）に質したところ、日本アルプスの冬山登山ではスキー活用者が少なく、自己誘発は死者の3割ぐらいではないか、という話であった。

北海道の登山者・スキーヤーの雪崩死14件（昭和13～49年）を筆者はかつて分析したが、10～11件が自己誘発事故とみなせ、残り3件は雪崩の通り道である沢筋に長時間宿営したための露营地選定の誤りに由来するものであった。

彼我のこうした違いはあろうとも、山岳スキーヤーこそ雪崩教育をうける対象の主たるべき、ということには変わりはない。この傾向は今後ますます強まりこそすれ、弱まる気配はない時代の風潮である。